

伊那山脈最高峰 鬼面山

テントの中は松茸で大騒ぎ

福D

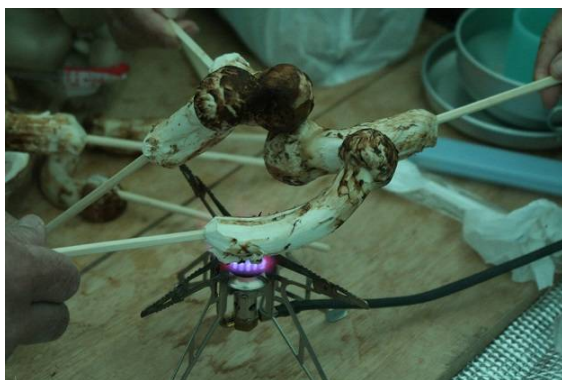
十月二十六日、二十七日と二日間、日本のチロル「下栗の里」を巡る旅と南アルプス前衛の伊那山脈最高峰「鬼面山」に登る目的で、出発した。メンバーはTKさん、K原塚さん、S々木雅枝さん、福D二人。

一日目は、日本のチロル「下栗の里、しらびそ高原」に向かう。真つ赤なすずなりのリンドの木を見ながら、車は走る。その後「松茸」「松茸」と、幟が、ハタハタと風になびき、我々を呼んでいる。どうやらこの地方は松茸が名物らしい。「松茸」の季節、一生に一度触ってみたい、食べてみたい、

そんなおしゃべりをしているうちに「松茸を買って、今夜、テントの中で食べようじゃないか」という事になった。「でも、高いよ」「皆で割り勘すれば、安い」等々。車の中は大騒ぎ。でも、いざとなると「この店は高そう、やめよう」等、尻込みしてしまう。車はどんどん高度を上げ、山道に入る。だんだん民家がなくなり、あ、やつぱり「松茸」は夢の中か、と、あきらめかけていると、一軒小さな「道の駅」に出会った。数台車が止まっていた。様子を見に私が代表で店の中に入る。なんと、店の中には、本物の松茸が、パ

ック詰めにされ、並んでいた。びっくりして、声も出ない。皆もゾロゾロ車から下りてきた。大きいものやら、小さいものやら。驚くのは値段、安いのです。パックにシダの葉を敷き七本入って「六〇〇〇円」これなら、今夜全員に一本ずつ、余った二本は鍋の中に入れてようと、買う事に。他に、「シヨウゲンジ」（六百円、）パックにあふれんばかり大盛りの「ヒラ茸」（三百円）を買う。松茸を買った時は、胸が躍った。今年は雨が多く暖かつたので、松茸は大豊作なんだそう。この夜のテントの中は、「松茸」で、大騒ぎ。松茸を割り箸で串刺しにし、丸焼き。松茸のよい香りがテントいっぱいひろがった。今夜は松茸、平茸、シヨウゲンジ、秋のきのこいっぱい鍋、すごい贅沢鍋です。一年に一回

だけの贅沢。お腹いっぱいになって、早めのおやすみなさい。



昼間はよい天気でしたが、その夜、雨が降り始めた。夜中に雨は止み、トイレに外に出ると、交通事故のガラスの破片の道路のようにキラキラ輝く満天の星空。こんな夜空を見たことがない。急に怖くなり、ゾクゾクと寒気がして、

すぐにテントの中に潜り込んだ。

翌日二十七日はいよいよ楽しみにしていた「鬼面山」。朝からよい天気だ。ガイドブックを読むと「途中岩礫の急斜面でやせた尾根上は手がかりもなく、ストックかピッケルがあると重宝する」と、書いてあったので、どんなにか恐ろしい所だろうと、ドキドキ。登山口に三体のお地藏様がいらした。手を合わせ「神様、仏様」と拝んだ。最初からいきなりの急登。やせ尾根。木の根っこが盛り上がり、尖がった岩、ザラザラの石で滑りやすい急登。また、半分、登山道の土が落ち、崩壊しているザレ場、全く谷底も見えない。下から冷気が吹きあがりガスがモアモアしてるだけ。恐ろしい所だと速足で通り過ぎる。登り始めから恐ろしい



登山道で、ガイドブックに出てるこれ以上恐ろしい場所はいっつも出てくるのか、心配ばかりしていた。ぐんぐん高度を上げ後ろを振り返ると、遠く、いや、近く、高く大きな山が見えだしてきた。あれは、南アルプス？ 恐ろしく高い。ようやく穏やかな登りになり、ブナの巨木が登山道脇に一直

に堂々と生え、とても立派だ。標高一七〇〇mから一八〇〇m辺りになると苔むした針葉樹の森に変わった。緑の苔が実に綺麗な。可愛い森の精が現れてきそうな気持ちのよい場所。そしてさらに高度を上げて登ると木々の間が狭くなり、登りつめると目の前がパツと開け、鬼面山山頂到着。

山頂には、郵便ポストと物見櫓が建てられてあった。丸太で作られ、古い櫓で腐っていた丸太もあった。皆、子供みたいにはしゃぎながら梯子を登っていった。「ワ すごい景色だ」「気持ちいい」「福田さん早く上がっておいでよ」「私は高所恐怖症だから行かない」「南アルプスが良く見えるよ。中央アルプスもよく見えるから、早く、早く」と言われても、しばらくは下で、抵抗していたが、上で、なん

やかんやとうるさい。ついに、垂直の八段はあったと思う木の階段を一步一步上がっていた。暖かい空の上にとびだした。真つ青な大空。三六〇度の大パノラマがひろがった。中央アルプスの千畳敷カールや宝剣岳、ホテルまで見えていた。あの時は高山病にかかってしまい、辛かったな。でも、来年の夏は木曾駒が岳に登ってみたい。南アルプスはどう、一生、縁のない場所、むなし、と、思いながら、ながめていた。

今日は我々だけの独占の山と思っていたら、ひよっこり一人の男性登山者が登ってきた。神奈川県から日帰りて来たという。さっそく、カメラをお願いしてしまった。よかった。皆で記念写真を取ることで、嬉しい。下に下りてゆっくり昼食を取った。郵

便ポストを開けると部厚い「記帳簿」と紐でつながれているマジックがはいっていた。ページをめくると、この山に登って来た人の住所と名前が書いてあった。我々五人の名前もかいた。この山に来る人は東海、関西地方が多い。そして、この山は一等三角点の山だった。1889mの伊那山脈最高峰の山。



帰りは素晴らしい紅葉を楽しみながら、ゆっくり下りてきた。登山口近くのモミジは緑、まだ、紅葉していないのに気がついた。結局、ガイドブックに書いてあった場所は最初の部分で知らずに通り過ぎたみたい。登山口にあるお地藏様にお礼のご挨拶をした。ワンカップの酒、いろいろなジュース類、本物の生花束までしおれかけていたが、お供えしてあり、地元で愛されている山であり、お地藏様だということがよくわかる。伊那山脈は遠かった。でも、明るいうすがすがしい山脈、また、春に、秋に訪れてみたい。秋はもちろん、「松茸」を買い占めたい。

素晴らしい山計画をしてくださり、ありがとうございます。またまた、私のお気に入りの山が増えてしまった。

新しい世界がまた広がりました。「鬼面山」は秋を迎えるころ、夕日をうけ、赤鬼のように真っ赤に染まることから、誰ともなしに「鬼面山」と、呼ぶようになったという。そういうえば克己さんの鼻の頭が、福D利光は顔全体が日焼けして、赤鬼のように真っ赤になった。登り始め七時二〇分下山は午後一時三〇分。

日本のチロル「下栗の里」は日本初巨大クレーターの残る里。大鹿村は中央構造帯のあの地形。地質学者なら、ワクワクしてしまいそう。桜の咲くころ皆さん行きませんか。「この指とまれ」

